

例もあった。3年無再発生存率の検討で、stage II症例の補助化学療法群で有意に悪く、再発高危険群を拾い上げている可能性が考えられた。

4 当科における大腸癌化学療法の現状

松澤 岳晃・飯合 恒夫・谷 達夫
丸山 聡・川原聖佳子・高久 秀哉
寺島 哲郎・清水 大喜・金子 耕司
奥山 晶子*・畠山 勝義
新潟大学第1外科
同 看護部がん化学療法看護認定
看護師*

5 当科における大腸がん術前化学療法の現状

瀧井 康公・岩谷 昭・神林智寿子
野村 達也・中川 悟・藪崎 裕
土屋 嘉昭・佐藤 信昭・梨本 篤
田中 乙雄
県立がんセンター新潟病院外科

Ⅲ. 特別講演

過敏性腸症候群の病態生理に基づいた合理的アプローチ

独立行政法人
国立病院機構さいがた病院院長
松 枝 啓

第59回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成19年6月9日(土)
午後3時～5時15分
会 場 朱鷺メッセ 中会議室201

I. 一般演題

1 ステロイドミオパチーをきたした潰瘍性大腸炎に対して一期的回腸囊肛門吻合術を施行した1例

金子 和弘・中塚 英樹・須田 武保
畠山 勝義*・吉田 英毅**
日本歯科大学医科病院外科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野*
吉田病院内科**

潰瘍性大腸炎治療中にステロイドミオパチーをきたした症例に対して一期的大腸全摘、直腸粘膜切除、W型回腸囊肛門吻合術を施行した1例を経験した。

症例は30歳、女性。潰瘍性大腸炎再燃時、ステロイド治療中に下肢の筋力低下が出現し、精査でステロイドミオパチーと診断された。外科治療の相対的適応と考え手術を施行した。回腸瘻を造設しない一期的手術を施行し、術後経過良好で、14病日に退院した。入院期間は短く、分割手術による精神的負担もなく、高いQOLが得られた。

2 約3年で進行癌となった大腸小隆起性病変の1例

田中 亮・坂本 薫・小野 一之
岡本 春彦・田宮 洋一
県立吉田病院外科

初回注腸において小隆起病変を認め、進行癌に至る3年を観察しえた症例を経験したので報告する。

症例は70歳、男性。注腸にて下行結腸に5mm